

同調行動が適応に及ぼす影響

— 社会的適応と内的適応の視点を中心として —

坂 本 剛

I. 問題・目的

わたしたちは、普段、様々な集団に所属している。そして、集団には規範が形成される。規範とは「社会的な」事実であり、それなくしては現実のあまりの複雑さにわたしたちの認知は追いつくことができないであろう。わたしたちは集団の規範に従うことで、周囲から承認され、所属感を得たり、安心したりする。規範に従わないでいることは軽蔑や排除をまねく。しかし、集団の規範にあわせていて、ときには、「わたしのやりたいことは違う」と感じたり、言いたいことが言えなかったりもして嫌な気分になったりする。個人は規範を通して集団の影響を受け、何らかの変化を経験する。

本研究は、そうした集団の規範に従うこと、つまり同調行動が個人に対してどのような効果を持つのか検討することを目的としている。先行研究において同調の効果について述べられてきたことは、社会的な適応を促進する(戸川, 1956)ということや、集団との葛藤を回避して内的緊張を低減する(田崎, 1967, 1971)といったポジティブな側面が主である。しかし、同調することによって、内心の自己意見と、集団意見に同調して提示した自己意見との間に葛藤が生じる場合も考えられる。Kouhara (1993)はこの状態を個人内不一致(intrapersonal discrepancy)の状態であると指摘し、認知的不協和を引き起こすと考える。自己意識研究の分野においても、自己意識と自己表出の間のずれが葛藤として経験される(梶田, 1988)と考えられている。しかし、所属欲求についての近年の知見からは、所属欲求は基本的な欲求であり、それがコストを要しても、基本的には人は関係の解消を望まないと言う指摘(Baumeister & Leary, 1995)もみられる。つまり、同調行動をとることによる葛藤を生じるというコストを要しても、人はその集団の成員であろうとすることが考えられる。これらの指摘から、同調による個人への効果は決して一義的に考えるべきではないと考えられる。よって、本研究は、集団内での同調行動が、他者や社会・社会的役割との調和である社会的適応と、心理的安定感や充足感を持ち自己受容の状態である内的適応にいかに影響するかの検討を行う。

ところで、前記のように同調は規範を念頭において行うものであり、規範は社会において演じられる役割につ

いての適切で受容されている期待の集合であるといえる。しかし、個人内の欲求や価値観が役割の要請と食い違う場合に、個人-役割間葛藤(role-person conflict)が生じる。つまり、内心に集団意見と異なるはっきりとした自己意見を持つ課題では、同調をとるか非同調をとるかの意志決定は重大な問題であり、特に自己意見を持たないような課題と比べて高葛藤な課題となる。よって、本研究では、同調する課題を高葛藤課題と特に自己意見を持たない低葛藤課題とにわけ

II. 研究1

<目的>クラス集団の成員を対象として、同調行動と適応の関係について検討する。同時に、志向性とスキルといった個人内の要因が同調にどのように影響するかを検討する。

<方法>「クラス」の単位のある医療系の大学・短大・専門学校の生徒419名(男性94名・女性323名・不明2名)を対象として質問紙調査を行った。質問紙は、志向性尺度・スキル尺度・同調行動尺度・適応尺度からなる。

<結果・考察>クラス集団では適応は2側面に分化していないことが示された。また、自分と集団の意見が異なる高葛藤課題で同調することは適応を低下させることが示され、課題により同調が適応にネガティブな効果を持つ可能性が示唆された。高葛藤課題よりも低葛藤課題のほうが同調は生じやすいという結果から、自己意見と集団意見が異なる課題では両者の間に葛藤が生じており、さらに同調しても非同調でも新たに葛藤を生じるが、特に自己意見を持たない課題では同調すると集団と自己の間の葛藤を回避でき、内的にも葛藤が生じないことが考えられた。また、主張性スキルの低いものは高葛藤課題での同調をすることで適応を促進していることが示された。

III. 研究2

<目的>研究1の目的に、クラス集団と職場集団という集団の質の差による影響を検討することを加える。

<方法>「クラス」の単位のある医療系の専門学校の生徒326名(男性34名・女性289名・不明3名)を対象とした。また、うち134名(男性13名・女性118名・不明3名)は職場についての質問紙にも回答してもらった。質問紙

同調行動が適応に及ぼす影響

の構成は、クラス集団用と職場集団用があるほかは、研究1とほぼ同じである。

〈結果・考察〉職場集団では同調行動は課題の質によってではなく、同調・非同調そのものにより因子がわかれた。また、職場集団では適応が内的・社会的の2側面にわかれることが示された。クラスと職場という集団の質の差は、同調と適応の程度の差としてではなく、構造の違いとして表れた。このことは、職場がクラスよりも斉一性圧力の強い集団であることを示すものと考えられた。また、研究1に続いて、主張性スキルが不足している場合、同調がクラスでは適応を促進し、職場では社会的適応を促進した。同じく、低葛藤課題では同調が生じやすかった。

IV. 研究3

〈目的〉より現実を反映した結果を得るために、中学生を対象に調査を行い、同調課題を場面想定法にし、社会的適応の指標として現実的な学校適応尺度を用いて下位概念に分けることを試みる。

〈方法〉N中学校の2年生78名（男子39名・女子39名）を対象とし、質問紙調査を行う。同時に、ソシオメトリックテストを導入し、客観的指標による測定を行う。

〈結果・考察〉同調行動が促進する社会的適応は、学校が生徒に求める規則や望ましい勉強態度といったフォーマルな規範への適応であった。社会的適応のもう一方の下位概念である先生や友人との関係の円滑さを示す対人適応と比較すると、フォーマルな規範への適応は、他の変数との関係から考えて、比較的受動的な適応状態であり、集団との浅い関係を示すと考えられた。このことから、同調行動により得られる社会的適応は関係の初期段階にみられるような状態であり、集団との密接ではない関わりを示すものと考えられる。また、同調と主張性スキルのフォーマル適応への交互作用がみられた。主張

性スキルの不足するものはいずれの課題でも同調することによりフォーマル適応が促進された。また、主張性スキルの不足するものは低葛藤同調をしやすいと遊び場面でのソシオメトリック地位は低下するが、主張性スキルの豊富なものは低葛藤同調するとソシオメトリック地位が向上した。つまり、低葛藤同調を示して、主張能力のあるものは、遊び場面での地位が高く、フォーマル適応も高い。このことから、フォーマル適応はあわせられることにはあわせるという行動により得られるが、遊び場面での地位の高さは、そこに主張能力が伴うかどうかで大きく異なることが考えられた。研究1・2と同じく、低葛藤課題は、同調が生じやすかった。

V. 総合的考察

研究で一貫してみられたのは、自分と集団の意見が食い違う課題よりも、自己意見が特でない課題でのほうが同調行動をとりやすいということであった。このことは、Kouhara (1993) の指摘するような同調・非同調によって生じる個人内不一致と対人不一致の存在を間接的に支持するものと考えられた。

また、主張スキルが不足するものは同調行動をとることによって社会的適応を得ているということも一貫してみられた。このことは、集団との葛藤を回避するための有効な手段を持たないときに、同調が効果を持つということを示すもので、同調が消極的な葛藤解決方略であることが考えられる。

研究3の結果から、適応への影響過程は集団形成の段階により異なると考えられ、同調の効果についての縦断的調査が課題とされた。また、研究2でみられた集団の差による同調と適応の構造の違いをさらに詳細に検討することも必要であると考えられた。今後は、規範への斉一性などについての集団風土（森田, 1988, 金井・若林, 1998）について考慮することが課題である。